

中学校英語科におけるオンライン国際交流授業実践
— EFL 学習者同士によるコミュニケーションを通して—

大塚恵理

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要 第8号

令和8年(2026)3月

中学校英語科におけるオンライン国際交流授業実践

—EFL 学習者同士によるコミュニケーションを通して—

大塚 恵理

(京都市立近衛中学校・京都教育大学大学院修了)

A Practical Study of Online International Exchange in Junior High School English Classes

—Developing Communicative Competence through EFL Learner interaction—

Eri OTSUKA

2025年9月28日受理

抄録：令和6年度に京都府内の公立中学校で実施されたオンライン国際交流授業について論考する。経済的な制約があるなかで、社会的な要請とICT活用を組み合わせ、また民間企業との協働により実現したオンライン国際交流は、EFL環境のなかで学ぶ日本の中学生にとって、英語をリング・フランカとして使用する貴重な体験となった。この体験は、英語教育における人格形成や資質・能力の育成に寄与するだけでなく、生徒の体験格差の解消にも貢献した。さらに、生徒の学ぶ姿やライティング作品、振り返りの記述を通して、オンラインでの国際交流が英語学習に対するモチベーションの向上と自分自身の将来像を描く一助となったことを確認することができた。

キーワード：オンライン国際交流、ICT活用、EFL、リング・フランカとしての英語、民間企業との協働

I. 本実践の背景と目的

グローバル社会を見据え、より国際的な広い視野を持った人材を育成したいという社会の要請のもと、様々な提言や計画が発表されている。外国語教育においても、EFL環境の日本のなかで「英語」という外国語の学びの必然性や有用性を生徒達に実感させるために国際的な経験をさせることはとても有意義であることは言うまでもない。ここでは近年の日本の提言や計画を紹介しながら、その課題を述べるとともに、人材育成という視点とは別に、学校教育における英語教育のなかで、国際交流という体験がいかに生徒の人格形成や資質・能力の育成に寄与するかに着目したい。

1. グローバル化する世界と求められる人材

急速なグローバル化が進む世界の中で日本でも「グローバル人材の育成」が叫ばれるようになって久しい。日本の英語教育においても2011年に「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」が示され、小学校での英語教育も始まった。コロナ禍を経て、「国際社会で活躍できる優秀な人材を育成」し、国際競争力を高めたい国家戦略により様々な提言がなされている。

(1) 教育未来創造会議 第二次提言

令和5年に示された「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ<J-MIRAI>」の提言における今後の方向性として「3. 教育の国際化」が挙げられている。具体的には2033年までの目標として、「日本人学生の留学を50万人」にすることや、中学・高校等での国際的な教育環境の整備として「対面での国際交流を行う高校の割合を50%」に、また「オンライン等を利用した国際交流を行う学校の割合を100%」にするという目標が掲げられている。初等中等教育段階における英語教育・国際理解教育についても、「英語4技能（読む、書く、聞く、話す）の育成に向けた、デジタルを活用したパフォーマンステストの実施促進や教員の英語教育・国際理解教育の指導力の強化、また1人1台端末を活用した海外とのオンライン交流の促進などが方策として提示されている。

(2) 第4期教育振興基本計画

令和6年に閣議決定された「教育振興基本計画」では、5つの基本的な方針のうち「①グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」の項目で「日本人学生・生徒の海外留学や、より若年段階からの国際的な交流活動の推進」「外国語教育の充実」の必要性や「デジタルの活用により様々な国際交流・教育プログラムの展開の可能性」「遠隔・オンラインとリアルを組み合わせた取組の推進」が述べられている。

(3) Global×Innovation 人材育成フォーラム 最終まとめ

令和7年、文部科学省は「Global×Innovation 人材育成フォーラム」の最終まとめを公表した。その中で「日本人の海外派遣」について、「若者の多様な成長を支える留学機会の提供」「留学の機運醸成」「経済的支援」からの提言が示され、留学機会の提供では「中学校や高等学校段階から、多様な国際経験の機会に誰もがアクセスできるよう地方公共団体・学校関係者に求める」ことや、「留学の有無にかかわらず国内にしながら国際経験が積める体制の構築」を進めることが求められた。

2. 公教育でできること—その責任と限界

政府はこのように様々な提言や計画を示しているが、実際に公立学校で海外留学や国際交流を実施することは容易なことではない。まず、交流相手を探す手だてがない。いくつかの国際交流に関する実践をみると、交流相手のほとんどは、担当教員の伝手を頼って見つけられた学校であったり、勤務校の協定校などである(小林(2024)、吉水(2024))。教員の個人的なつながりで実現した国際交流は、その教員が異動したらその後の継続は困難になることが予想される。また、相手校の都合により途絶える可能性も十分にある。一方で、私立学校などではその姉妹校との交流や幹旋業者に依頼して国際交流や海外留学を実施しているところもあるが、それには多額の費用がかかり、公立学校で同様のことを実施するのは現実的ではない。公立学校で国際交流を計画しようとしても、相手校探しや経済的な負担のために断念せざるを得ないということが多くあると思われる。

(1) 海外留学の実際

一言に「海外留学を促進する」といっても、いざ留学を考えたときに一番大きな懸案事項は費用面である。ある語学学校の調査によると、1年の語学留学に必要な費用は、留学先にもよるが年間300万円から500万円が必要であるようだ。政府の提言にも「経済的支援」とあるが、何人の生徒にその支援が提供されるのかは定かではない。結果的に、留学は経済的に余裕のある家庭の子どもしか経験できないということが現実には多く起きているのではないか。親の経済格差が子どもの体験格差に直結している点は最も見逃されてはいけない点であり、公教育は教育の力でこの格差を是正することを第一に考えなければならない。

(2) 就学援助実施状況

世界情勢をみると政情不安や関税の引き上げ、インフレ等による円安や物価高、日本国内でも景気後退など、明るいニュースは少ない。令和6年度の就学援助実施状況の調査の結果を見ると、令和5年度の就学援助率は13.66%である。公立学校では経済的に恵まれない生徒も少なくなく、特に義務教育機関である公立中学校では英語科の学習のためだけに多額の保護者負担をお願いすることはできないのが現状である。

難題山積のなか、それでもなんとかして生徒たちに国際交流体験をさせることはできないものか、とあれこれ模索する日々がつづいた。

3. 民間企業との協働—HelloWorld 株式会社との出会い

上記のような課題に直面している時にたまたま目にとまったのが、学校に郵送されてきた1通のDMだった。そこには「英語教員の業務効率化を進める EdTech ツール WorldClassroom 無償導入希望校募集のご案内」とあった。これは HelloWorld 株式会社(以下 HelloWorld 社)が経済産業省「働き方改革支援補助金 2024」を活用した、WorldClassroom というアプリを利用する事業であったが、内容をみると「海外の同世代と国際交流!」とあったので、これを使えば生徒達に国際交流を体験させられるかもしれないと考え、早速応募した。2023年度は「応募者多数のため」採択には至らなかったが、2024年度にはありがたいことに筆者の勤務校が無償導入校に採択され、今回のオンライン国際交流授業を実現することができた。

4. オンライン国際交流授業の目的

義務教育機関である中学校においては、教育基本法や学習指導要領に照らし合わせながら教育をすることが中学校教育の根本原則に位置付けられている。オンライン国際交流が「学校教育としての英語教育」にどのようなインパクトを与えるのかという観点から、本実践の目的を述べる。

(1) 人格形成としての英語教育

教育基本法では教育の目的として、「人格の完成を目指し」とある。英語教育における人格形成とは、相手意識（他者性）にあるのではないかと考える。相手にどう伝えれば伝わるのか、ということ意識したり、互いに協力しながら対話を構築する。ましてや、対話の相手は海外の生徒である。他者に働きかける経験は自己意識を発達させる契機となり、人格形成に寄与するのではないだろうか。本実践では外国の生徒を相手に、母語が使えない状況のもとでやりとりを継続するという体験的な学びが生徒の人格形成に役立つのではないかと考えた。

(2) 学習指導要領 外国語科の目標

学習指導要領解説による外国語科の目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る能力の基礎となる資質・能力」を育成することを目指す。このうち、本実践では4技能5領域の1つである「話すこと[やりとり]」のうち、「ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする」および「イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする」を目標としたい。[やりとり]を成立させるために、これまでの授業では **turn taking** と **communication strategies** について継続的に指導してきた。また、つなぎ言葉やあいづちを適切に使用しながらやりとりを継続させることについても指導してきた。これまで「やりとり」の相手はクラスメート、教科担任の授業者、ALT しか経験がなかった生徒達ではあるが、今回のオンライン国際交流授業でもこれらの学びを発揮して、生徒たちがオーセンティックなコミュニケーションを楽しむとともに、学校での英語学習の意義を再確認し、今後の英語学習への意欲が高まることを期待している。

(3) 英語を学ぶ意義・目的—EFL 環境のなかで学ぶ日本の生徒たち

「なぜ英語を学ぶのか」—多くの生徒が一度は口にする言葉である。EFL 環境にある日本において、日常的に使う必然性のない英語という外国語を学ぶ意味を見失ってしまう生徒もいるだろう。なかには昨今の翻訳アプリを使えば自分がわざわざ英語を学ばなくてもいいのではないかとさえ考えている生徒もいる。今回のオンライン国際交流授業は、自分たち以外にも母語ではない英語を学んでいる生徒がいることを知り、お互いの母語ではない「英語」という共通語を通してコミュニケーションが成り立つという体験になるだろう。生身の人間同士のコミュニケーションの豊かさや楽しさを体験することを通してリンガ・フランカとしての英語の存在に気づき、英語を使って「わかった」「伝わった」という喜びを感じることができれば、英語を学ぶ理由やその意義を見出すための内発的動機づけを高める体験になるのではないだろうか。

(4) 本実践の目的

以上のことを踏まえ、本実践の目的として次の3つを設定した。

- ・海外の EFL 環境で英語を学ぶ同世代の生徒とのやりとりを通して自らの成長に気づき、英語を使って社会で活躍する自分の将来像を思い描く機会とする。
- ・学校の英語学習で身につけた知識・技能を活用し、国際交流体験を通して相手国について学びながら異文化理解を深め、自国の良さに気づきながらより広い世界へと視野を広げるとともに英語学習への意欲を高める。
- ・英語を使ったオーセンティックなコミュニケーション体験を通して、リンガ・フランカとしての英語の有用性を実感させるとともに、英語を学ぶよさや楽しさ、学校で英語を学ぶ意義や目的を再認識させる。

II. 実践の内容

ここでは、オンライン国際交流を実施するにあたり、事前指導、当日の様子、事後指導について述べる。

1. 参加者について

本実践における参加者は、京都府内の公立 A 中学校に在籍する中学 2 年生 (3 クラス : 105 名) である。オンライン交流相手校は、インドネシア S 校の 7~9 年生 40 名とフィリピン D 校の 10 年生 38 人である。インドネシアは EFL 環境である一方、フィリピンは ESL 環境である。しかしながら、普段はインドネシア語、タガログ語を使っている生徒達である。

2. 事前指導・事前準備

国際交流をする生徒達への事前の指導は授業のなかで帯活動として実施した。相手校との折衝など、実施に必要な事前の準備に関しては、HelloWorld 社との協働で取り組んだ。

(1) 生徒への事前指導

生徒への事前指導は、オンライン交流授業の 10 日前から、通常の授業と並行して、帯活動で実施した。事前指導にはワークシートを作成し、手順がわかりやすいようにした。具体的には、①オンライン国際交流授業の概要、グループ決定、係分担、②相手国についての調べ学習、③交流のテーマ決定、④交流内容に応じた準備、⑤端末の動作確認 (リハーサル)、名札など準備物作成、等に取り組ませた。グループは各クラス 3~4 人×8 グループとし、普段の生活班の座席を基準に割り当てた。交流では、自己紹介と学校紹介を共通テーマとし、後半は班ごとに自由にテーマを設定させることとし、各グループで考えさせた。多かったテーマは、食べもの、アニメ、ゲーム、スポーツ、観光地、音楽などであった。中学 2 年生にしては少し簡単な内容ではあるが、アウトプットが中心となる活動であることを考慮し、現段階の英語力よりは少し易しいテーマを設定するように指導した。そのほうが自信を持って安心して取り組むことができると考えたからだ。また、グループ内で話す内容や質問内容が重ならないよう、話し合いをさせながら分担を考えさせた。端末の動作確認は HelloWorld 社の方が中心となり実施してくださった。

(2) 事前準備、相手校との折衝

交流学习そのものに関する日程や相手校とのマッチングは主に HelloWorld 社が担当した。中学校からは、日程の希望とグループ数、やり取りしたい内容を伝えることのみで、その他の細々した折衝をお任せできたのは本当に助かった。表 1 は HelloWorld 社と学校が分担した、事前の準備である。これら全てを学校で、英語科教員のみで担うのは負担が大きすぎるが、民間企業と協働により役割が明確となり、負担感はずいぶん軽減された。

中学校	HelloWorld 社
日程、交流授業形態のリクエスト	日程調整、事前打ち合わせ
生徒への事前指導	事前学習用資料の提供
校内授業変更、広報依頼	交流相手校とのマッチング
相手校教員との打ち合わせ (オンライン)	相手校教員との打ち合わせセッティング
会場設営、機材準備	リハーサル運営 (端末動作確認)
当日の指導	当日の進行、機器トラブル対応
生徒への事後指導	事後アンケート集計、報告

表 1 学校と企業の事前準備の分担

実は、今回の交流授業では、前日にフィリピンに台風が接近して、交流予定の相手校が休校となる事態となり、フィリピンの学校と交流する予定だった 1 クラスの交流授業は延期となった。このような想定外の事態においても、HelloWorld 社が迅速に対応してくださることにより日程を再調整していただくことができた。また、予定していた当日は、交流授業の代わりに特別授業を準備してくださった。このような一連の対応は、英語科一人では到底できなかったのではないかと。多くのスタッフとチームで仕事をしておられる民間企業だからこそできたのだと思う。企業と学校との協働がうまくいった好事例である。

3. オンライン国際交流授業当日の様子

ここではオンライン国際交流授業当日の様子を概説する。

(1) 交流授業の内容

授業は HelloWorld 社が中心となって進行された。Wi-Fi の接続を考慮して、1 クラス（8 グループ）を 2 教室に分けて実施した。各グループに 1 台の GIGA 端末を使い、HelloWorld 社が準備してくださったスプリッターを使って 4 人が 1 台の端末とつながった。交流はウェブ会議システムの Zoom を使って行われた。HelloWorld 社の司会により、①オープニング（両校の教員によるあいさつ）、②アイスブレイキングと交流時の諸注意、③ブレイクアウトルームでの交流（1 回目）、④ふりかえり、⑤ブレイクアウトルームでの交流（2 回目）、⑥まとめ、両校の代表生徒によるお礼のあいさつ、記念撮影、の順に進められた。交流中に接続が途絶えたり、音声が届かなくなるなどのトラブルには、当日中学校に来てくださっていた HelloWorld 社の方が対応してくださった。授業者（筆者）は 2 つの教室を往復しながら、グループの様子を見て回ることができた。

(2) オンライン国際交流授業の特徴

今回の交流授業で特筆すべきは、ブレイクアウトルームでの交流が 2 セッション（12 分×2 回）あったことである。これにより、生徒は 1 回目のセッションでうまくいかなかったことをふりかえりの時間に微調整して 2 回目のセッションに挑むことができた。その結果、2 回目のセッションではコツをつかみ、より自信をもって活発に取り組んでいるグループが多くあり、やりとりの様子についても生徒の変容が見て取れた。

(3) 生徒の様子

ここでは、生徒のやりとりの様子から、筆者が気付いたコミュニケーション方略(Communication Strategies)の使用とグループでの協働について述べる。

コミュニケーション方略については、小学校では「4 つのたいせつ」として、clear voice, eye contact, gestures, smile が指導されている。中学校でもこの 4 つについては継続して意識的に指導してきた。また、あいづちを使って会話を円滑に進めることや沈黙による会話の break down を引き起こさないことも中学校では意図的・継続的に指導してきた。はたして、実際のコミュニケーションの場面で、生徒達はこのような方略を即興的に使えるのかを観察した。生徒達は、オンライン越しで聞きづらいこともあってか、One more please. や、Once more. などを多用していた。また、やりとりのなかで、相手の発話に対して“Nice!”や“I like it!”“Me, too.”などの声が多く聞かれた。生徒達は普段使い慣れているこのようなあいづちを実にうまく使ってやりとりを継続させようとしていた。生徒の振り返りの記述からも、「がんばったところは I see. や OK. などを使ってあいづちを打つことができたことだと思います」や「相手が言ったことの意味がわからなかったら、ワンモアなどを使って聞き返すことができた（原文ママ）」「笑顔やジェスチャーなど、しっかり反応することを意識して楽しく話せた」「相手の質問が聞き取りづらかった時もあったけど、ワンモアプリーズと言って落ち着いてもう一度聞き直すこともできた（原文ママ）」「自分たちが話したとき、相手が聞こえてなさそうなら Can you hear me? と伝えられたし、逆のときもジェスチャーをしたりすることができた」など、生徒達はこちらの心配をよそに、実にたくましく、巧みにコミュニケーション方略を駆使していることがわかった。

グループでの協働については、事前に「先生は 2 つの教室を行き来しているので、いつものように「先生～わからへん」などと助けを求めることはできません。だから、グループのメンバーで協力して乗り越えてください」「分担をしているけれど、グループのメンバーが困っていたら、みんなで助け合いなさい」と伝えておいた。実際にはどのように対処するのかを観察していると、わからない、という顔をしているメンバーに「もう一回聞いたら?」「Once more って言ってみたら?」と助言する姿や、相手に通じていない時に「もう 1 回言ってみ?」「もうちょっと大きな声で言ってみたら?」と励ましている姿が見られた。また、「white shirt って言ってるから、あなたのことじゃない?」と相手の発話内容をグループ内で確認し合ったり（本校は自由服の学校なので、いわゆる標準服を着用していない）、相手の発話を聞き取れて、みんなで「おおー!」と喜び合っている姿もみられた。それぞれのグループが力を合わせてサバイバルしている姿はとてもほほえましく、また頼もしく感じた。生徒の振り返りの記述にも「会話のなかで上手く聞き取れなかったり、どう伝えればいいか迷うこともあったけれど、グループで協力しながら交流を続けられたというのもよかった」や、「相手からの突然の質問をききとれなかったりすることがあった。グループの人と協力し、なんとかこたえられた」などがあった。自分たちの「知

りたい」「伝えたい」という思いを4人で共有してなんとかやりきろうとがんばっていた姿がとても印象的であった。

4. 事後指導

事後指導として、教科書(New Horizon English Course 2 (東京書籍))のLet's Write 2(p.67)を活用した。教科書では「ホームステイのお礼状—手紙—」というタイトルで、「お世話になった人に、手紙で感謝の気持ちを伝えることができる」という目標が設定されている。実生活の中では、生徒達には英語でお礼状を書く相手はいないので、この学習活動は毎回悩ましいのである。しかしながら、今回は「オンライン国際交流授業でやりとりをした相手の学校の生徒に向けて、お礼状を書こう」という学習課題を設定し、交流授業の翌日に実施した。生徒達は本当に心のこもった「お礼状」を書くことができた。やはり、実際に相手がいることで、気持ちも動き、書く内容にもリアリティのある「本当の言葉」が綴られ、まさに生きた学習活動になった。いくつか生徒の手紙を紹介したい。(以下、原文ママ。名前は伏字。)

(1) 生徒 A

この生徒のグループは、交流の最初に音が聞こえないという端末のトラブルがあり、急遽端末を取り換えることになり大変慌てたグループの一つである。トラブルを乗り越えて、話す時間は短くなったけれど、お互いにやりとりができたことを喜び合い、「Talking about Japanese anime was really great.」だったことがわかる。

October 29, 2024

Dear Indonesian friends,
How are you? I'm good.
Thank you for talking with me. I had a great time.
There was a problem, but I enjoyed talking with you.
Talking about Japanese anime was really great.
I hope to hear from you.

Best wishes,
○○○

(2) 生徒 B

この生徒は、相手グループのなかに、自分の好きな歌手 Taylor Swift を好きな生徒がいたことを知り、うれしかったのであろう。生活している国は違うけれど同じ歌手を好きだという同世代の友達がいる場所への興味が、「いつかインドネシアに行ってみよう」という一文に表れている。

October 29, 2024

Dear my friend in Bali,
How are you?
Thank you for talking with me.
I enjoyed talking with you all.
I was happy to hear that a person that I talked with likes Taylor Swift, too.
I would like to visit Indonesia someday.

Best wishes,
○○○

(3) 生徒 C

この生徒は、今回の交流がよい「学びの体験」になったとし、「I will continue to study.」と自分の決意を述べている。さらに、事前学習で調べたインドネシア語の Terima kasih (ありがとう) を使っている。相手に寄り添う感謝の気持ちの表れであろう。交流を通して、英語学習をがんばろうと気持ちを新たにするとともに、英語以外の言語にも興味を持っている姿がうかがえる。

October 29, 2024

Dear my friends,
How are you? I am good.
Thank you for wonderful talking.
Talking with you was a learning experience.
I will continue to study.
Please do your best.
Terima kasih
I look forward to seeing you again someday.
Best wishes,
○○○

(4) 生徒 D

この生徒は、交流前は何も知らなかったインドネシアについて、交流後には「インドネシアの文化や相手の学校について学んだ」と、交流の成果をまとめている。最後には「いつかまたあなたと話をすることを楽しみにしています」と期待をこめて締めくくっている。この生徒が本当に「もっと話したかったなあ」と思った気持ちが言葉となり、手紙のなかに表出されている。

October 29, 2024

Dear my friend in Indonesia,
How are you? I am good.
Thank you for a nice time. I don't know about Indonesia before. But after talking with you, I leaned about Indonesia culture and your school.
I look forward to speaking you again someday.
Best wishes,
○○○

(5) 生徒 E

この生徒は、相手の生徒達が日本の文化をいろいろ知っていてくれたことをとてもうれしく思っている。また、相手の生徒達の英語使用の流ちょうさから「あなたたちのように英語を話したい」とあこがれを抱いている。さらに、「いつかインドネシアを訪れたい」と親近感を抱いている。こうした気持ちは、リアルな体験を通してしか生まれてこないのではないだろうか。

October 29, 2024

Dear my friends,
How are you? I'm good.
Thank you for speaking with us.
I was very happy because you know a lot about Japanese culture.
I want to speak English like you.
I want to visit Indonesia someday.
I hope to hear from you.
Best wishes,
○○○

Ⅲ. 成果と課題

初めてのオンライン国際交流授業は、HelloWorld 社との協働により成功を収めることができた。多くの生徒達が今回の体験を通して達成感や自信を得て、また異文化への理解も深まったことがわかる。さらには、英語学習への意欲の高まりも確認できた。一方で、国際交流授業を実施する上での課題も明らかになった。本稿のまとめとして、その成果と課題を整理しておきたい。

1. 成果

ここでは、事後アンケートから見えてきたことと、生徒の振り返りからわかったことを成果として示す。

(1) 事後アンケート結果

オンライン国際交流授業の後に、アンケート調査を実施した。アンケートは、生徒が各自のタブレット端末で回答し、HelloWorld 社が集計を担当してくれた。ここではその結果の一部を紹介するとともに、令和5年度と平成31年度（令和元年度）の全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果とも比較する。

まず、国際交流授業の満足度に関して、「国際交流の授業に満足しましたか」「国際交流授業によって、英語をもっと上手に話したいと思いましたか」「国際交流授業によって、世界中の文化や生活についてもっと知りたいと思いましたか」「国際交流は、英語学習に役立つと思いますか」の4つの質問に関しては、全ての質問に90%以上の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と肯定的な回答をした（図1）。この結果から、生徒達は国際交流授業を通して、英語学習への意欲を高めている様子や、異文化への興味の高まりを感じていることがわかる。

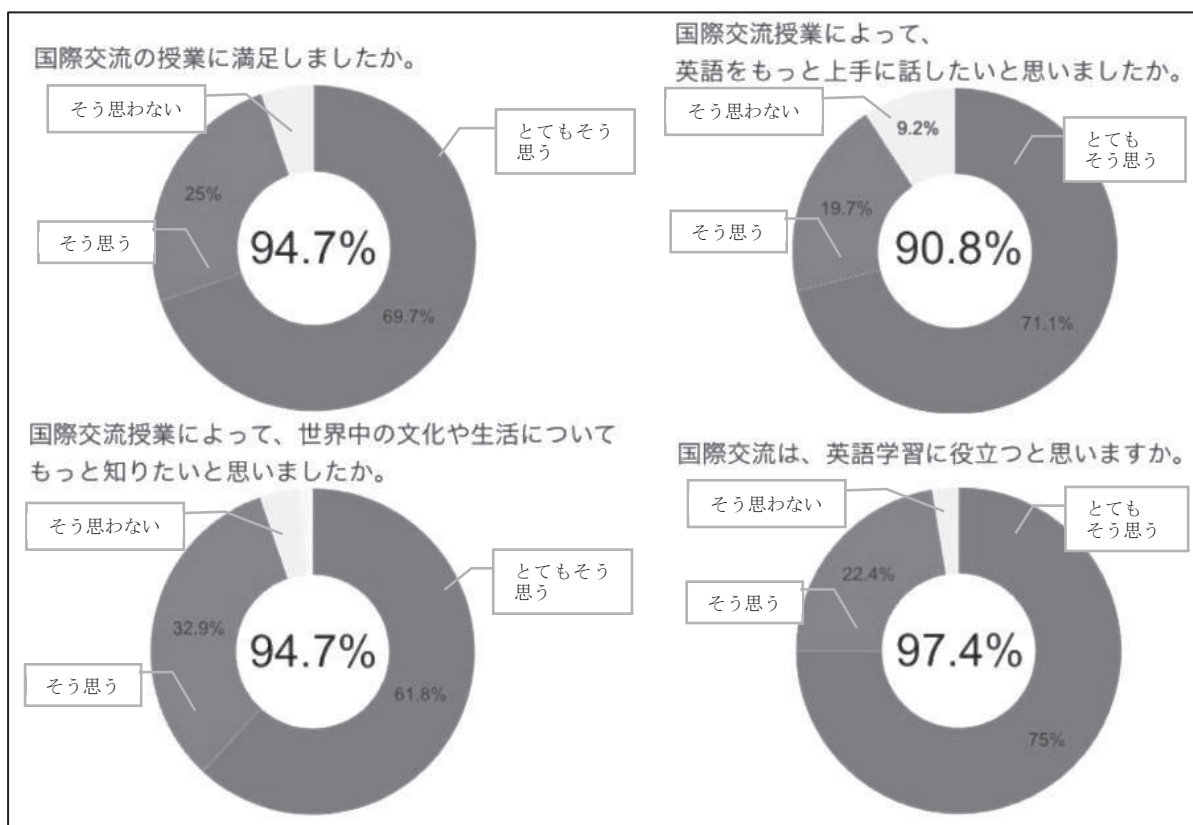


図1 国際交流授業後アンケート結果(n=76)

次に、英語学習と将来について、「将来、積極的に英語を使うような生活や職業を目指したいと思いますか。」の質問に対して、本校生徒は61.8%の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と肯定的な回答をしているのに対して、令和5年度の全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、肯定的な回答をした生徒は37.2%である。この結果は、国際交流を通して、生徒が将来英語を使う生活や職業に興味を持ったことを示しており、国際交流の体験は、生徒の将来像にも一定の影響を及ぼしていることがわかる。（図2、図3）

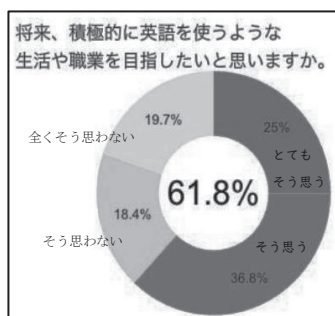


図2 国際交流授業後アンケート結果

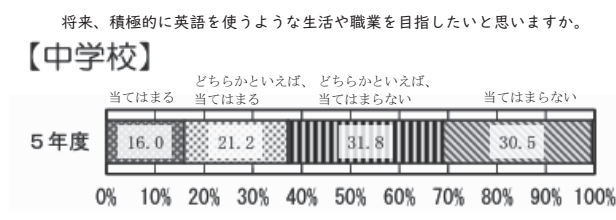


図3 令和5年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査結果

さらに、「英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」の質問に対して、本校生徒は96.1%が肯定的な回答をしているが、平成31年度（令和元年度）の全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、肯定的な回答をした生徒は85.7%である。この結果から、本校生徒は、国際交流授業を通してより学校での英語授業の有用性を感じていることがわかる。

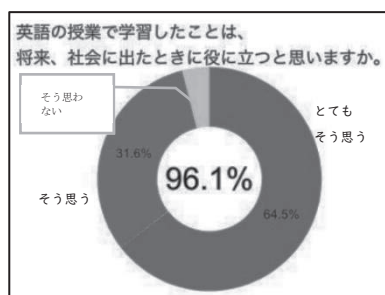


図4 国際交流授業後アンケート結果

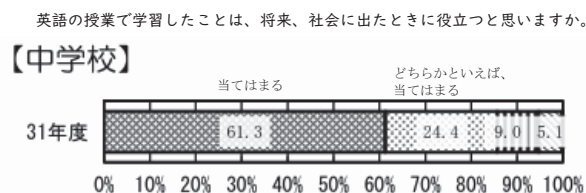


図5 平成31年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査結果

(2) 生徒の振り返り

事後アンケートの自由記述欄には、生徒達の様々な気づきについて書かれていた。その中でも多くの生徒が、英語でのコミュニケーションを「楽しかった」と感じていることや、「伝わってうれしかった」という体験ができたことが今回の国際交流授業の実践を通じた一番の収穫であった。以下、一例を紹介する。

【コミュニケーションの楽しさ】

- ・英語でしかコミュニケーションがとれない状況のなか、どのようにすればわかりやすく伝わるか、どんな表現の仕方があるかなど、いつもの英語の「話す」よりも難しかったです。でもその分、伝わったとき、コミュニケーションができたときの喜びもたくさんありました。
- ・母国語が通じない相手となれていない言語で会話をすることは日本ではできないことで、貴重な体験だったなと思います。難しかったけれど、自分の言っていることが相手に伝わり、また相手が言っていることがわかったとき、とてもうれしく、楽しかったです。
- ・最初は全然しゃべれなくて緊張していたけど、途中から気軽に話すことができたし、英語も分かれば楽しいと思った。

【ノンバーバル・コミュニケーションの大切さ】

- ・ジェスチャーや笑顔、アイコンタクトの大切さがより感じられたので、普段からたくさん取り入れたいです。
- ・笑顔で会話を楽しむことができた。相手がリアクションしてくれた時としてくれなかったときの安心感が全く違って、よりリアクションの大切さがわかった。

【英語の有用性・将来の目標】

- ・言葉の違いや住んでいるところの違いはあれど、英語という共通語でどんな国の人でもつながれるということとはとても素晴らしいと思った。私は今回の国際交流でいろいろな人たちとコミュニケーションを取ることができる英語の素晴らしさを知ることができました。願わくば、将来は様々な国の人たちと英語でコミュニケーションがとることができる仕事に就きたいと思いました。

2. 課題

90%以上の生徒が国際交流授業を楽しんで、英語学習に役立つと感じてくれた今回の実践は大変意義深いものであった。しかしながらいくつかの課題も残っている。

(1) 準備

今回は民間企業との協働により多くを助けられたが、時間割の変更や、会場設営、授業準備など、多くの時間と労力が必要だった。結果、時間外の仕事が増えてしまった。これが学校だけで実施していたらどうなっていたらと思うと、この実践の難しさが際立つ。また、海外校との打ち合わせでは、話がかみ合わないことも多く、今回のように天候による急な予定変更なども起こりうることも知った。お互いに歩み寄る柔軟さ、臨機応変さ、異文化理解もますます必要だと感じた。

(2) 経済的負担

今回は HelloWorld 社からの無償提供によりオンライン国際交流授業が実現できた。しかしながら、もし有償になると、保護者負担が大きくなりすぎるため公立学校では実施が難しくなる。経済的負担という大きな壁が子どもたちの学びを阻む悲しい現実がある。保護者の経済格差が子どもの体験格差に影響するのはなんとしても解消すべき課題である。このような取組に対して自治体などの援助があるところもあると聞く。全国でそのような施策がなされ、子ども達の学びの格差が解消されることを強く願う。

(3) GIGA 端末の整備

今回の交流授業のなかでは、GIGA 端末の不具合が続出した。普段から故障や不具合は多い。GIGA 端末も3年を超えると限界が来ているのかも知れない。また、Wi-Fi 環境も1クラスでさえ同時に実施することは難しい現実があった。いくら学校教育で ICT を活用するように言われても、このような整備が不十分だとできるものもうまくいかない。あらためて、さらなる GIGA 端末の整備・改善が必要である。

IV. まとめにかえて

今回の実践は、生徒にとっても筆者にとっても初めての実践であった。生徒達は今回のオンラインでの国際交流を通して、海外の生徒という「他者」を通してさまざまな気づきを得た。自国の文化が海外でよく知られていることや、自分が知らなかった相手国のことに興味を持つなど、自国の文化理解だけではなく異文化理解も深まった。また、同じ EFL 環境で学ぶ同世代の生徒達の英語運用力をみて、多くの生徒が自分ももっとがんばって英語の勉強をしようと感じた。そして、体験を通して「リング・フランカとしての英語」の有用性に気付くとともに、英語をもっと学びたいという英語学習への意欲を高め、日本のような EFL 環境で英語を学ぶ意義を見出してくれた。たった一度の国際交流体験であったが、海外と出会うことがこんなにも中学生に多くのことを与えてくれるのだということは想像以上の成果であった。一人でも多くの日本の生徒たちがこのような体験を通して英語学習を楽しみ、英語でのコミュニケーションの喜びを感じることができるよう、学校教育が担う責任も大きく、行政と力を合わせて今後も推進していきたい。こうした彼らの真正の学びの先に、グローバル人材として活躍する彼らの未来があることが理想であると考えている。

主要参考文献・引用文献

国立教育政策研究所(2023)令和5年度全国学力・学習状況調査報告書・集計結果

国立教育政策研究所(2019)平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査報告書・集計結果

小林翔(2024)「テクノロジーを利用した情意面とスピーキング力の向上ーオンライン交流ー」、『LET 関西支部研究集録』, pp.65-89

東京書籍株式会社.(2021) *NEW HORIZON English Course 2*, 文部科学省検定済教科書.

文部科学省(2017)中学校学習指導要領解説 外国語編

吉水慶太(2024)「オンラインビデオ通話によるインドネシアの中学校との国際交流」、『英語教育』大修館書店, 東京, pp.34-35